

# 韓国の中学校英語科の教育課程の変遷

カレイラ松崎順子

## 要 旨

本稿では、韓国の教授要目から始まり、第1次教育課程、第2次教育課程、第3次教育課程、第4次教育課程、第5次教育課程、第6次教育課程、および第7次教育課程までの一部の翻訳を行い、韓国の中学校英語科の教育課程が時代とともにどのように変化したのかを考察した。その結果、韓国の英語科の教育課程には多少の例外はあるが、一貫して英語学習を行うことにより韓国の文化を外国に発信し、韓国の発展に寄与することが目標として記載されていることがわかった。また、教授法においては、1950年代における訳読読解中心の授業から1970年代に大きく文法重視に変わり、1980年代から徐々に使える英語というものを意識するようになり、1990年代には教授内容が文法中心から概念・機能を中心とする項目に変わり、そのような土台のもと1997年に小学校に英語が導入されるようになったことが明らかになった。

## 1. はじめに

日本では現在、2011年度より全国の小学校で小学5・6年生は週1時間、年間35時間の外国語活動が実施されているが、教科として英語を教えていないため、テストなどはもちろん、評価なども行われていない。しかし、2020年度（2018年度から段階的に先行実施）から小学校に英語が正式に教科として導入される予定であり、今後小学校の英語に関する詳細な学習指導要領が作成されると思われる。

一方、韓国では1995年に第6次教育課程が一部改訂され、1997年に小学校に英語が導入された。ゆえに、日本において小学校への英語の導入が検討されはじめた2000年以降、同じアジアである隣国の韓国の英語教育は注目されるようになり、それに伴い、韓国の英語の教育課程に関する研究は多く行われてきた。たとえば、カレイラ（2011）は韓国の2007年改訂教育課程および日本の学習指導要領における英語教育に関する比較を行っており、河合（2004）は第7次教育課程の韓国の英語教育について詳述している。その他、金（2007）、樋口（2008）、師子鹿（2009）、およびカレイラ（2012）は韓国の小学校の英語教育に関する記

述の中で第7次教育課程と2007年改訂教育課程について詳述している。

一方で、小学校に英語が導入される前、すなわち1997年以前の教育課程に関する研究は日本ではほとんど行われていない。しかし、韓国の英語教育のことをより深く把握するためには、現状のみを論じるだけではなく、そこに至るまでの変遷を知る必要があるであろう。韓国では1946年に教授要目が設定されて以降、さまざまな教育改革が行われてきた。具体的には、教授要目(1946-1954)から始まり、第1次教育課程(1954-1963)、第2次教育課程(1963-1974)、第3次教育課程(1974-1981)、第4次教育課程(1981-1987)、第5次教育課程(1988-1991)、第6次教育課程(1992-1996)と続き、1997年12月30日に第7次教育課程が告示され、その後も2007年改訂教育課程、2009年改訂教育課程、2015年改訂教育課程と一部改訂が続いている。本稿では韓国の小中学校の英語科の教育課程のうち、特に、今まであまり研究されてこなかった第1次教育課程前の教授要目から第7次教育課程までの一部の翻訳を行い、韓国の中学校の英語科の教育課程が時代とともにどのように変化し、小学校への英語の導入に至ったのかを考察していくことにした。なお、本稿では学年別の目標・内容は、紙面の関係上中学1年生(第7次教育課程では小学3年生と中学1年生)のみ掲載した。

## 2. 教授要目の時期(1946-1954)

光復(解放)をむかえて中等普通教育が始まり、1946年に教授要目が戦後の混乱の中、制定されたが、統合された教育課程は用意できなかつたため、各科目で教えるべき主題を列挙する程度の教授要目を発表した(教育科学技術部, 2007)。

英語科の方針にはⅠ)教授要旨、Ⅱ)教授の方針、Ⅲ)教授事項、Ⅳ)教授上の注意が記載されており、英語の基礎力育成のための最小限の教科内容と指導方法が提示されているが、教授の目的・目標などは記載されていなかった。以下が教授要目の中学校英語科の教授要旨と教育方針である(文教部, 1946, 著者翻訳)。

### 教授要旨

英語を理解させ、活用できる基礎力を育成し、外国に関する識見を養成し、外国に関する識見を広げ、我が国の文化を発展させる。

### 教授方針

1. 理解と発表ができるように英語を活用させて会話力と作文力を養成する。
2. 翻訳・文法などを通して読解力を高める。
3. 発音・スペル・語法などに留意させ、言語に対する常識を得るようにする。

4. 簡単な英語でシェークスピア時代までの文を精読し、多読で興味、教養、実用の価値を常に念頭に置き指導すること。

上記の教授方針は英語をはじめて学習する中学生にとっては、いずれもかなり高すぎる方針であったと思われる。また、「1. 理解と発表ができるように英語を活用させて会話力と作文力を養成する」以外は、「2. 翻訳・文法などを通して読解力を高める」、「3. 発音・スペル・語法などに留意させ、言語に対する常識を得るようにする」など全般的に訳読・文法に重きを置いており、「4. 簡単な英語でシェークスピア時代までの文を精読し、多読で興味、教養、実用の価値を常に年頭に置き指導すること」とあるように英文の精読や多読を薦めている。さらに、教授方針には聞くことについて触れている箇所はなく、英語力を4技能という観点で捉えていないことがわかる。これらのことから教授要目では、概して英語の読解力養成に力を入れていたといえるであろう。

### 3. 第1次教育課程（1954-1963）

1954年に教育課程時間配当基準令が公布され、生活経験を重視する経験中心の教育課程の目標を設定して、これを達成するための各教科活動の目標と内容が細分化され（教育科学技術部、2007）、教授要目には記載されていなかった教育目的、教科内容や指導方法などがより詳細に記載されるようになった。しかし、英語科教育課程に関しては様々な英語教授法理論が記述してあるのみで、理論の一貫性が欠如していた（教育科学技術部、2007）。以下が第1次教育課程の中学校英語科の教育目的・教育目標、および基本方針である（文教部、1954、著者翻訳）。

#### 中学校英語科の教育目的

中学校英語科の教育目的は一言で要約しようとするなら、国民学校で受けた教育を土台として英語の基礎を理解・活用させることで、国際的な考察を可能にし、韓国と他国との違いを理解させ、韓国の伝統と現実を正確に把握させることで中心となる国民としての教養と機能を向上させることを目的としているといえる。これをもう少し詳しく分析してみるならば大きく次の4種類に要約できる。

- (1) 国民学校教育で得た国語能力を土台にして学生の言語生活の深化拡充を行う。
- (2) 学生にとって自分と自分が属する社会および国家以外にも言語を別にする民族と国家が同等な地位にあるということを理解させて国際的道義心、責任感、功德心、および協同精神を育てる。
- (3) 特に、外国の文化と比較・評価して学生に韓国民族の伝統と現状を正確に理解させ、民

族意識を高め、独立自尊の気風を育てると同時に国際協力と国際正義の精神を育てる。

- (4) 英語の理解・活用を通じて国民の社会生活、職業生活、文化生活の能力、技術、態度を向上させる。

### 中学校英語科の教育目標

1. 英語の音声・語彙・文法・態・書式を理解し、体得させることにより、国語科（韓国語）との相違点を理解する能力を養う。
2. 思考・感情・礼儀・風習・習慣・歴史・自然・環境など文化・制度の相違点を理解できるように体得させる。
3. 上述したような相違はあるが、相互を尊重することは共通した義務で、正義は人類の生活の基本原則であることを理解させ体得させる。
4. 現代の英語の平易で広く普及している語彙で構成されている簡易な文型を体得させ、基礎的な英語の理解力と発表力を持たせる。

### 中学校の英語科課程の基本方針

1. 言語的興味と文化的興味を刺激し、この興味を持続させるようにする。
2. 言語の論理的価値よりも実際の価値を尊重しなければならない。
3. なるべく英国・米国の生活と文化を身近な例として紹介するようにする。
4. 英語の発音と文法の理解・活用をもとに聴取力・読書力・口述力・記述力を共に伸ばしていく。
5. 少ない教材を徹底して教授しなければならない。
6. 教材を選択する際にも教養的価値と文化的価値よりも言語的価値と実用的価値を第一にし、難解な語法よりも簡単な語法を第一にし、口述よりも聴取を第一にし、記述よりも読書を第一にし、新しい教材の導入よりも既習の教材を優先して配列する。
7. 英語科の直接の目標を達成するために科学的・具体的な教育計画を立て、英語科の間接的目標を達成するために随時教師が適切な措置を取るようにする。

以上のことから第1次教育課程の特徴として、第一に、英語は国語（韓国語）を土台にした言語教育であり、英語と韓国語の相違点を理解させることが重要であること、さらに、英語圏の文化を学ぶことによって、より韓国文化に目を向けさせ、民族意識を高めるようとしているのがわかる。また、教授要目では聞くことについての記載はなかったが、第1次教育課程では聴取力・読書力・口述力・記述力と4技能についての記載が見られるようになり、特に、「口述よりも聴取を第一にし」「記述よりも読書を第一にし」と記載されており、言語習得においてインプットが重要であることが力説されている。また、「少ない教材を徹底し

て教授していかなければならない」、「新しい教材の導入よりも既習の教材を優先して配列する」と書かれており、同じものを何度も反復して学習することの重要性を説いている。

#### 4. 第2次教育課程（1963-1973）

韓国においては4.19革命、5.16軍事政変という激変期を迎え、急激な政治的・社会的変化に対応しながらそれらを教育に反映させるために大々的な教育課程改編が行われ、1963年に第2次教育課程が公布され（教育科学技術部、2007）、中学校英語科では1.「聞くことと話すこと」、2.「読むこと」、3.「書くこと」の3つに分かれた「指導内容」が具体的に示されるようになった。以下が第2次教育課程の中学校英語科の目標と指導内容である（文教部、1963、著者翻訳）

##### I. 目標

1. 日常生活で使う簡易な英語を聞いて話す能力を育てる。
2. 英語の初歩的な語法に習熟させ、簡易な日常生活で使う英語を読んで書く能力を育てる。
3. 英語学習を通じて英語母語話者の日常生活と彼らの風俗・習慣を理解させ、国際的理解と協調心を育てる。

##### II. 指導内容

###### 1. 聞くことと話すこと

- (1) 中学校で使う言語材料は日常生活を中心に使用度が高いものを選択する。
- (2) 基礎的な発音を正確に習得させる。
- (3) 聞くことと話すことの学習活動には次の事項を含む。
  - ①英語を聞いて英語の音声に慣れさせる学習
  - ②英語を聞いて発音または話す学習
  - ③実物や絵を見せて発音または話す学習
  - ④英語の指示に従って動作する学習
  - ⑤教師や他の学生の簡易な行動をストーリーにして表現する学習
  - ⑥基礎的な文型を暗唱してそれを現状に適應させて実際に活用する学習
  - ⑦習得した文型をさまざまな場面で応用して話す学習
  - ⑧教師や他の学生の質問に答え、さらに、教師や他の学生に質問する学習
  - ⑨互いに問答する学習
  - ⑩日常生活で経験した簡易な仕事を学級で発表する学習

## 2. 読むこと

- (1) 言語材料は日常生活で使う標準的な言葉にする。
- (2) 文型は基礎的なことに限る。
- (3) 学習する新出単語の数は次の基準に基づく。
  - 第1学年 300-400 (350)
  - 第2学年 350-450 (400)
  - 第3学年 400-600 (500)
  - 合計 1,050-1,450 (1,250)
- (4) 読むことの指導において資料は日常生活に関することを主として次の事項を考慮しなければならない。
  - ①学習目標の達成にあっていること。
  - ②学習に興味と変化があるようにすること。
  - ③学習内容がある一つの部分にだけ偏重しないように、全体的な均衡を保つようにすること。
  - ④学習の到達度を考慮すること。
- (5) 読むことの指導資料を自由に選択できるが、主に文型の提示、対話、説話、説明文、日記、手紙など簡易な時事文などにする。
- (6) 学習活動の中では次の事項を考慮する。
  - ①教師のあとについて音読する学習
  - ②読むことの教材に基づいて実物または、絵を提示して音読させる学習
  - ③カードなどを利用して単語、句、節、文章を正確に読めるようになる学習
  - ④学生個人が音読する学習
  - ⑤クラス全体または、グループで音読する学習
  - ⑥対話や劇をグループで音読する学習
  - ⑦読んだものを正確に理解するための問答または、要約する学習

## 3. 書くこと

- (1) 書くことの内容はすでに習得したものを主とする。
- (2) 基礎的な文型の構成、綴り、大文字、句読点などに関する正確で基礎的な用法を習得させる。
- (3) 学習活動中には次の事項を含むようにする。
  - ①筆記体を書く学習
  - ②見て書く学習
  - ③簡易な書き取りの学習



- ④文章の一部を他の言葉に変える学習
- ⑤完成しなかった文章を完成させる学習
- ⑥単語、句、節などを提示して文章を作らせる学習
- ⑦間違った文章を直す学習
- ⑧口頭または、筆記による問いに対し書いて答える学習
- ⑨簡易な手紙と日記を書く学習
- ⑩クラスのお知らせを言葉で書いてそれを貼る学習

第2次教育課程の特徴として以下の2つがあげられる。第一に、「英語母語話者の国民の日常生活と彼らの風俗・習慣を理解させ」とあるように英語圏の文化の理解が主となり、第一次教育課程で力説されていた英語と韓国語の相違点を理解させることや韓国文化や韓国人としての民族意識などの表現はなくなった。また、目標においても「聞いて話す能力」「読んで書く能力」の4技能を高めることが明記されており、さらに、指導内容においても1. 「聞くことと話すこと」、2. 「読むこと」、3. 「書くこと」の3つに分類され、それぞれ具体的な内容が書かれるようになり、かなり現在の教育課程に近づいた。

## 5. 第3次教育課程（1973-1981）

第3次教育課程は1973年に公布され、教科の知識体系を構造化し、探求学習を強調する学問中心の教育課程であるといわれている（教育科学技術部、2007）。英語科教育課程の目標は全体の目標と学年別の目標に区分され、内容は言語機能と言語材料で区分されるようになった。以下が第3次教育課程の中学校英語科の一般目標、中学1年生の目標および内容（言語機能のみ）である（文教部、1973）。

### （1）一般目標

- カ）英語使用の初歩的な機能を育て、優しい英語を理解し、生活に関する内容を簡易な英語で書いて効果的に表現できるようになる。
- ナ）英語学習を通して、英語母語話者の思考方式と文化を理解し、それを通して我が国の文化の価値をより一層認識させることにより、民族・文化の発展に寄与できる基本的資質を育てる。

### （2）学年目標

〈第1学年〉

- （カ）自らの生活周辺に関連した簡易な英語を読んで聞いて、理解する能力を育てる。

## 韓国の中学校英語科の教育課程の変遷

- (ナ) 家庭、学校など生活周辺に関した初歩的な英語で話して使える能力を育てる。
- (ダ) 外国の文物に関する基礎的なことを理解する。

### ナ. 内容

#### 第1学年

##### 1) 言語機能

##### (カ) 聞くことと話すこと

- ①英語の音韻体系を習うこと
- ②容易な内容の挨拶を交わすこと
- ③簡易な内容の問答を行うこと
- ④簡易な内容の対話を交わすこと

##### (ナ) 読むこと

- ①アルファベットのブロック体および筆記体を識別すること
- ②口頭で慣れた語彙を読むこと
- ③容易な内容の文を声を出して読むこと
- ④容易な内容の文を読んでその意味を理解すること

##### (ダ) 書くこと

- ①アルファベットのブロック体および筆記体を書くこと
- ②綴字法および基礎的な句読法に慣れること
- ③口頭で慣れた容易な英語を見て書くこと
- ④口頭で慣れた容易な英語の書き取りを行うこと
- ⑤口頭で慣れた容易な英語を書くこと

上記から第3次教育課程の特徴として以下の2点があげられる。第一に、第2次教育課程では、「英語母語話者の国民の日常生活と彼らの風俗・習慣を理解させ」とだけあり、韓国に関することは記載されていなかったが、第3次教育課程では「英語学習を通して、英語母語話者の思考方式と文化を理解し、それを通して、我が国の文化の価値をより一層認識させることにより、民族・文化の発展に寄与できる基本的資質を育てる」とあるように、英語を学ぶことにより、より韓国の文化の価値を認識させ、自国の民族・文化の発展に寄与するということが記載されており、第1次教育課程に書かれていた内容に再び戻った。第二に、学年別の詳細な目標・内容が学年ごとに書かれるようになり、さらに、言語材料に文型、文法事項欄が新設され、品詞成分の構造と文章の形態に焦点を置いて教育するようになった。すなわち、第3次教育課程から文法説明中心の授業が行われるようになったといえるであろう。



## 6. 第4次教育課程（1981-1987）

第4次教育課程は1981年に公布され、国際化・開放化の国政の指標にあわせて、英語科教育課程を「生活英語の駆使力」を最大限に伸ばす方向で改編している（教育科学技術部，2007）。以下が第4次教育課程の中学校英語科の全体の教育目標と中学1年生の目標と内容（言語機能のみ）である（文教部，1981，著者翻訳）。

### 教育目標

英語の使用能力を育て、英語を使用する国民の文化を理解することによって我が国の文化発展に貢献する。

- 1) 生活周辺および身近な一般的な話題に関する容易な英語を理解して使用できる能力を育てる。
- 2) 英語を母語とする国民の文化を理解できる土台を作る。

### 〈1学年〉

#### 1) 目標

- カ) 学生の生活に関する簡単な対話できる能力を育てる。
- ナ) 日常生活に関する容易な話を聞いて理解する能力を育てる。
- ダ) 日常生活に関する容易な文を読んで理解する能力を育てる。
- ラ) 学生の生活に関する容易な文を書くことができる能力を育てる。
- マ) 英語を母語とする国民の日常生活を理解するようになる。

#### 2) 内容

##### カ) 言語機能

##### (1) 聞くことと話すこと

- (カ) 発音に慣れる。
- (ナ) 容易な内容の話聞いて理解する。
- (ダ) 挨拶の言葉など簡単な対話を行う。

##### (2) 読むこと

- (カ) 文を音を出して読む。
- (ナ) 文章の意味を理解する。
- (ダ) 容易な文の大意を把握する。

##### (3) 書くこと

- (カ) 綴りと基本的な句読法を習う。

- (ナ) 簡単な話を書き取る。
- (ダ) 口頭で慣れた英文を書く。

第3次教育課程と第4次教育課程の全体の目標を比較してみると、第3次教育課程では「英語使用の初歩的な機能を育て、優しい英語を理解し、生活に関する内容を簡易な英語で書いて効果的に表現できるようになる」とあり、書けるようになることが目標になっているが、第4次教育課程では「生活周辺および身近な一般的な話題に関する容易な英語を理解して使用できる能力を育てる」となり、「書ける」から「使用できる」に変わっている。さらに、第4次教育課程では目標・内容のいたるところに「日常生活」という表現が見られるようになった。これらのことから学問中心・文法学習中心であった第3次教育課程から第4次教育課程では「使える英語」「日常生活」への方向に転換していったといえるであろう。

## 7. 第5次教育課程（1987-1992）

1987年に第5次教育課程が公布され、第5次教育課程で追求する人間像は（1）健康な人、（2）自主的な人、（3）創造的な人、（4）道徳的な人であり、英語科の目標は英語でコミュニケーションできる能力を育てて外国の文化を受け入れて自国の文化を紹介できるようになることを目標としている。以下は第5次教育課程の中学校英語科の全体の目標および中学1年生の目標と内容（言語機能のみ）である（文教部、1987、著者翻訳）。

### カ. 教科目標

容易な英語を理解して、考えと感じたことを正しく表現できる基本能力を育て、外国の文化を正しく受け入れて我が国の文化を紹介できる土台を準備する。

### ナ. 学年別目標および内容

〈1学年〉

#### 1. 目標

- カ) 日常生活に関する容易な話を聞いて理解し、簡単な対話を行うことができる能力を育てる。
- ナ) 日常生活に関する容易な文を読んで理解し、それらを使える能力を育てる。
- タ) 英語母語話者の国民の日常生活を理解する。

#### 2. 内容

- カ) 言語機能

- (1) 聞くことと話すこと
  - (カ) 音を識別して正確に発音すること
  - (ナ) 容易な内容の話を聞いて理解すること
  - (ダ) 学習した内容を中心に簡単な対話を行うこと
  - (ラ) 実物や絵を見て簡単な対話を行うこと
- (2) 読むこと
  - (カ) 文字と音の関係を理解すること
  - (ナ) 簡単な文章を正確な韻律で読み取ること
  - (ダ) 容易な文の大意を把握すること
- (3) 書くこと
  - (カ) 綴りと基本的な句読法に慣れさせること
  - (ナ) 学習した容易な内容の文章を書き取ること
  - (ダ) 言葉で表現できることを文として書くこと
  - (ラ) 事物に対する説明を簡単な文章で書くこと

第4次教育課程と第5次教育課程を比較してもあまり大きな違いは見られないが、いくつかの変更点があげられる。第一に、教科目標において第4次教育課程では「英語を使用する国民の文化を理解することによって我が国の文化発展に貢献する」というようにあいまいであった表現が、第5次教育課程になると「外国の文化を正しく受け入れて我が国の文化を紹介できる土台を準備する」というように韓国の文化を外国に英語で紹介できるようになることが英語科の目標であることが明確に示されるようになった。第二に、第5次教育課程になると1学年の読むことの内容に「文字と音の関係を理解すること」「簡単な文章を正確な韻律で読み取ること」などというように文字と音との関係を学ぶフォニックスに関する記載が増え、さらに、読むだけでなく、韻律にも注意を向けるようになった。

## 8. 第6次教育課程（1992-1997）

1992年に公布された第6次教育課程で追求する人間像は第5次教育課程と同様に、(1)健康な人、(2)自主的な人、(3)創造的な人、(4)道徳的な人であり（教育科学技術部、2007、著者翻訳）、英語科の目標も第5次教育課程とほぼ同様に、外国の文化を受け入れて自国の文化を外国に紹介できるようになるということが最も重要視されている。以下が第6次教育課程の中学校英語科の全体の目標と内容および中学1年生の目標と内容である（教育部、1992、著者翻訳）。

## 目標

容易な英語を理解して、自分の考えと感じたことを流暢に表現できる基本能力を育て、外国の文化を正しく受け入れ、我々の文化を発展させ、これを外国に紹介できるようになる基礎を作る。

- カ. 日常生活と身近な一般的な話題に関する容易な話の文の内容を理解できるようになる。
- ナ. 理解した内容をもとにして話や文で簡単に表現することができるようになる。
- ダ. 容易な話や文で状況にあわせて、意思疎通ができるようになる。
- ラ. 外国の文化を理解することによって、我々の文化を新たに認識し、正しい価値観を持つようになる。
- マ. 我々の文化を話や文で簡単に紹介することができるようになる。

## 3. 内 容

### カ. 内容体系

#### (1) 言語機能

- (カ) 意思疎通のための理解と表現できる機能を自然に習得できる内容
- (ナ) 聞くことと読むことを通して英語を理解し、これを活用して言葉と文で表現する能力を開発

#### (2) 意思疎通の機能

- (カ) 下記に関する意思疎通の機能の理解と適用
  - 考えや感じの表現
  - 親交活動，対人関係形成
  - 要請，指示，情報交換，意見交換，問題解決など

## 学年別内容

### 〈1 学年〉

#### (1) 言語機能

##### (カ) 理解機能

- 1) 音と意味の関係を理解すること
- 2) 音と文字の関係を理解すること
- 3) 簡単な話を聞いて行動すること
- 4) 簡単な質問や返事を理解すること
- 5) 簡単な対話や文の内容を理解すること

##### (ナ) 表現機能

- 1) 自然に発音すること
- 2) 学習した内容を簡単に言葉や文で表現すること
- 3) 実物や図を見て簡単に対話すること
- 4) 簡単に要求したり命令したりすること
- 5) 日常生活に関して容易な話や文で表現すること

第3次教育課程より文法中心の項目によって教える内容が提示されていたが、第6次教育課程では以下のような概念・機能を中心とする項目で提示されるようになり、コミュニケーション能力を重視するようになった。

〈考えの表現〉

○可能性

I can do it.

He can't swim well.

○希望・意志

What are you going to do?

I'll start tomorrow.

## 9. 第7次教育課程（1997-2007）

1997年に公布された第7次教育課程では個人差を考慮した学生中心、コミュニケーション能力の重視、活動と課題中心、論理的思考力と創造性の伸長、国家発展とグローバル化への貢献ということが強調された（教育科学技術部、2007、著者翻訳）。さらに、第7次教育課程では「レベル別教育課程」になり、以下の3つの課程に分かれた（教育科学技術部、2007、著者翻訳）。

- 深化・補充型水準別教育課程：小学3年生から6年生までに適用し、同じ学年の生徒の進路を同等に維持するが、学習速度が速い生徒は深化学習を、遅い生徒は補習をできるように運営する。
- 段階型水準別教育課程：中学1年生から高校1年生までに適用し、各段階の終わりに評価を受けて一定のレベル以上となる学生だけ次のステップに進むようにする。
- 科目選択可能レベル別コース：高校2年生～3年生に適用し、学生は自分が望む科目を選択することができ、自分のレベルと進路に必要な科目を選択して勉強することができる。

また、小学校に英語が導入され、第7次教育課程<sup>1)</sup>には小学校の教育課程が記載されることになった。ここでは小学3年生および中学1年生を検討していく。以下は第7次教育課程の英語科全体の目標と学年別の内容である（教育部，1997，著者翻訳）。

## 2. 目標

日常生活に必要な英語を理解して使用できる基本的な意思疎通能力を育てる。合わせて、外国の文化を正しく受け入れて我々の文化を発展させ、外国に紹介できる土台を築く。

- カ. 英語に興味と自信を持って、意思疎通できる基本的能力を育てる。
- ナ. 日常生活と一般的な話題に関して自然に意思疎通する。
- ダ. 外国の多様な情報を理解して、これを活用できる能力を育てる。
- ラ. 外国の文化を理解することによって我々の文化を新しく認識して、正しい価値観を育てる。

## 3. 内容

〈3学年〉

— 聞くこと

- (1) 英語の音，強勢，リズム，抑揚を聞いて識別する。
- (2) 単語を聞いてその対象が分かる。
- (3) 1つの文の簡単な指示，命令を聞いて反応を見せる。
- (4) 個人，家庭，学校生活に関連した容易で簡単な対話を聞いて理解する。
- (5) 短くて容易な内容のチャンツや歌などを聞いて理解する。
- (6) 容易で簡単なゲームや遊びの内容を聴いて理解する。
- (7) 慣用的な表現を理解する。

[深化課程]

- (8) 単語を聞いて，単語間の意味関係が分かる。
- (9) 文章を聞いて，その文章が現わす絵を捜し出す。

— 話すこと

- (1) 強勢，リズム，抑揚に合うように話す。
- (2) 身近な対象の名前をいう。
- (3) 実物や図を見て，単語，または1つの文で話す。
- (4) 個人，家庭，学校生活に関して容易で簡単な対話を行う。
- (5) 短くて容易なチャンツや歌をまねる。
- (6) 容易で簡単なゲームや遊びに参加する。



(7) 挨拶のような慣用的な表現を行う。

[深化過程]

(8) 実物や絵を見て文章単位で話す。

(9) 個人、家庭、学校生活に関し、簡単な対話を行う。

〈7-a 段階〉 (中学1年生前期)

— 聞くこと

(1) 日常生活に関する話を聞いて、大意を理解する。

(2) 日常生活に関する話を聞いて主題を理解する。

(3) 簡単な対話を聞いて、状況および話者間の関係を理解する。

(4) 日常生活に関する話を聞いて、自身の経験と考えを結びつける。

(5) 日常生活に関する話を聞いて、適切な助けを受けながら表や図を完成する。

[深化過程]

(7) 日常生活に関する話を聞いて状況を理解する。

(8) 簡単な話を聞いて出来事が起きた順序がわかり、その根拠を理解する。

— 話すこと

(1) 身近な事物と人について説明する。

(2) 日常生活に関する話を聞いて細部事項を言う。

(3) 実物、絵、表などの資料を利用して簡単な説明を行う。

(4) 容易で簡単な問題を解決するために他の人と情報を共有する。

[深化過程]

(7) 学習した対話文を状況を変えて友達と対話する。

(8) 実物、絵、表などの資料を利用して対象を比較する。

— 読むこと

(1) 日常生活に関する短い文を読んで、主題および要旨を理解する。

(2) 日常生活に関連した図表を含む短い文を読んで理解する。

(3) 短い文を読んで文の順序が分かる。

(4) 個人生活を紹介した容易な内容の手紙を読んで理解する。

(5) 短い文を読んで、分からない単語でも簡単な語句の意味を文脈を通じて推測する。

[深化過程]

(6) 不完全な文章を読んで、適切な単語を入れて文章を完成する。

(7) 順序が間違っている文章を読んで順序を正す。

—書くこと

- (1) 学習した文章を聞いて書き取る。
- (2) 自身に関する写実的な質問に対する答えを書く。
- (3) 文章を読んで適切な句読点（休符，引用符，終止符など）を表示する。
- (4) アルファベットの筆記体の大文字・小文字を書く。

[深化過程]

- (5) 日常生活に関連した容易な内容の絵や図表を見て，文章で書く。
- (6) 家族に関する写実的な質問に対する答えを書く。

〈7-b 段階〉（中学1年生後期）

—聞くこと

- (1) 語調と抑揚で話者が感じていることや情緒を把握する。
- (2) 日常生活に関する話を聞いて大意や細部事項を理解する。
- (3) 日常生活に関する話を聞いて，課題を遂行する。
- (4) 容易な内容の写実的情報と説明を聞いて理解する。

[深化過程]

- (5) 過去，現在，未来に関する簡単な対話を行う。
- (6) 短い話を聞いて理解する。

—話すこと

- (1) 日常生活に関する簡単な対話を行う。
- (2) 一連の事件を順序に合うように話す。
- (3) 日常生活に関する容易で簡単な話を聞いたり文を読んだりして原因と結果をいう。
- (4) 自身の経験や計画に対して簡単に話す。

[深化過程]

- (7) 完成していない文を聞いた後に，結末を完成して話す。
- (8) 好きな短い話を暗唱する。

—読むこと

- (1) 日常生活に関する文を読んで大意を把握する。
- (2) 日常生活に関連した図表を含む短い文を読んで理解する。
- (3) 短い文を読んで文の順序が分かる。
- (4) 個人生活を紹介した容易な内容の手紙を読んで理解する。
- (5) 短い文を読んで，分からない単語や簡単な語句の意味を文脈によって推測する。

[深化過程]

- (4) 完成していない文章を読んで、適切な単語を入れて文章を完成する。
- (5) 順序が間違っている文章を読んで順序を正す。

—書くこと

- (1) 学習した文章を聞いて書き取る。
- (2) 自身に関する写実的な質問に対する答えを書く。
- (3) 文章を読んで適切な句読点（休符，引用符，終止符など）を表示する。
- (4) アルファベットの筆記体の大文字・小文字を書く。

[深化過程]

- (5) 日常生活に関連した容易な内容の絵や図表を見て、文章で書く。
- (6) 家族に関する写実的な質問に対する答えを書く。

第7次教育課程の大きな特徴は小学校に英語が導入されたことで、小学3年生から英語が始まり、中学校からの英語教育の内容が大きく変わったことである。また、個人差を考慮した「レベル別教育課程」になり、深化・補充型水準別教育課程を設け、学習速度が速い生徒は深化学習を、遅い生徒は補習ができるように運営し、中学1年生から高校1年生まで前期と後期に分け、段階型水準別教育課程を適用し、各段階の終わりに評価を受けて一定のレベル以上となる学生だけ次のステップに進むようにした。また、第7次教育課程では、概念・機能中心の教授項目と文法中心の教授項目の両方を提供しており、さらに、自然な状況での意思疎通能力を養うことができるように様々な題材が使われていた。

## 考 察

ここでは、教授要目から小学校に英語が導入されるまでの第7次教育課程までの韓国の中学校の英語科の教育課程が時代とともにどのように変化したのかを通時的に考察していく。

第一に、第1次教育課程では、英語は韓国語を土台にした言語教育であり、英語と韓国語の相違点を理解させることが重要であること、英語圏の文化を学ぶことによって、より韓国文化に目を向けさせ、民族意識を高めるようとしていたが、第2次教育課程になると「英語母語話者の国民の日常生活と彼らの風俗・習慣を理解させ」とあるように英語圏の文化の理解が主となった。しかし、第3次教育課程では「英語学習を通して、英語母語話者の思考方式と文化を理解し、それを通して、我が国の文化の価値をより一層認識させることにより、民族・文化の発展に寄与できる基本的資質を育てる」とあるように、英語を学ぶことにより、より韓国の文化の価値を認識させ、自国の民族・文化の発展に寄与するということが記載さ

## 韓国の中学校英語科の教育課程の変遷

れており、再び自国の文化、民族意識を高めることが目標に含まれるようになった。第4次教育課程以降は自国の文化発展、または自国の文化を外国に紹介できる土台を築くということが教科目標の最初に書かれるようになり、韓国の英語科の教育課程では、韓国の文化を英語で外国に発信し、韓国の発展に貢献することが第2次教育課程以外一貫した目標として示されてきたことがわかる。

次に教授法の観点から考察していく。教授要目では訳読・文法に重きを置いており、シェークスピアの精読や多読を薦め、概して英語の読解力に力を入れていたが、第1次教育課程では、教授要目では記載がなかった聞くことについても記載されるようになり、英語力を4技能として捉え、特に、言語習得におけるインプットの重要性が力説されるようになった。第2次教育課程になると、目標や指導内容においても4技能について具体的な内容が書かれるようになり、かなり現在の教育課程に近づいた。第3次教育課程になると、学年別の詳細な目標・内容が学年ごとに書かれるようになった。さらに、言語材料に文型、文法事項欄が新設され、このころより文法説明中心の授業が行われるようになった。一方、第4次教育課程になると「生活周辺および身近な一般的な話題に関する容易な英語を理解して使用できる能力を育てる」という目標になり、英語を使うという方向に大きく変わった。第5次教育課程では文字と音との関係を学ぶフォニックスに関する記載が増え、さらに、ただ、読むだけでなく、韻律にも注意を向けるような内容になった。第6次教育課程では、文法中心の項目から概念・機能を中心とする項目に変わり、言語材料に概念・機能を中心とする項目が列挙されるようになり、第7次教育課程では小学校に本格的に英語が導入されたため、中学校からの英語教育の内容が大きく変わり、さらに、段階型水準別教育課程を適用し、各段階の終わりに評価を受けて一定のレベル以上となる学生だけ次のステップに進むようにするなど大きな改革が行われたのである。

## おわりに

本稿では、韓国の教授要目から始まり、第1次教育課程、第2次教育課程、第3次教育課程、第4次教育課程、第5次教育課程、第6次教育課程、および第7次教育課程までの一部の翻訳を行い、韓国の中学校の英語科の教育課程が時代とともにどのように変化したのかを考察してきた。その結果、韓国の教育課程では多少の例外はあるが、一貫して英語学習の目的は韓国の文化を外国に発信し、韓国の発展に寄与することが目的であるという考えが根底にあることがわかった。また、教授法においては、1950年代における訳読読解中心の授業から1970年代に大きく文法重視に変わっていき、1980年代から徐々に使える英語というもの意識するようになり、1990年代には教授内容が文法中心から概念・機能を中心とする項目に変わり、このような土台のもと1997年に小学校に英語が導入されたのである。今後

は日本の学習指導要領と詳細に比較し、両者の類似点および相違点を検討していきたいと考えている。

#### 謝 辞

本研究は、2015年度の東京経済大学個人研究助成費（研究番号15-12）を受けた研究成果である。

#### 注

- 1) なお、1997年の初等英語開始当時、「第6次教育課程」に初等英語教育課程を付け加えて利用していた。

#### 引用文献

- カレイラ松崎順子（2011）「韓国の2007年改訂教育課程および日本の学習指導要領における英語教育に関する比較」『東アジア研究』55, 1-15
- カレイラ松崎順子（2012）「Korean Educational Broadcasting System English (EBSe) のコーパス分析—Tok Tok English と Nonstop English の比較—」『日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要』31, 65-86.
- 教育科学技術部（2007）『中学校教育課程解説 V 外国語（英語）・裁量活動・漢文・情報・環境・生活・外国語』
- 教育部（1992）『中学校 教育課程』  
<http://ncic.kice.re.kr/nation.dwn.ogf.inventoryList.do#>
- 教育部（1997）『外国語科 教育課程』  
<http://ncic.kice.re.kr/nation.dwn.ogf.inventoryList.do#>
- 金泰勲（2007）. 「韓国の初等学校における英語教育の現状と課題」『日本大学教育学会』42 75-94.
- 師子鹿元美（2009）. 「韓国における早期英語教育—釜山広域市小中学校英語没入教育特別職務研修プログラムを通して—」『別府大学短期大学部紀要』28, 71-80.
- 樋口忠彦「諸外国における小学校外国語教育」 樋口忠彦（編）『これからの小学校英語教育—理論と実践—』研究社, 2005年, pp. 1-33
- 文教部（1946）『小中高等学校各科 教授要目集』  
<http://ncic.kice.re.kr/nation.dwn.ogf.inventoryList.do#>
- 文教部（1954）『中学校 教科課程』  
<http://ncic.kice.re.kr/nation.dwn.ogf.inventoryList.do#>
- 文教部（1963）『中学校 教育課程』  
<http://ncic.kice.re.kr/nation.dwn.ogf.inventoryList.do#>
- 文教部（1973）『中学校 教育課程』  
<http://ncic.kice.re.kr/nation.dwn.ogf.inventoryList.do#>
- 文教部（1981）『中学校 教育課程』  
<http://ncic.kice.re.kr/nation.dwn.ogf.inventoryList.do#>

韓国の中学校英語科の教育課程の変遷

文教部（1987）『中学校 教育課程』

<http://ncic.kice.re.kr/nation.dwn.ogf.inventoryList.do#>